

## 第2章 上黒岩遺跡1群土器

### はじめに

愛媛県上黒岩遺跡〔江坂ほか1967〕は、縄文時代草創期研究に大きな研究史上の意義を有する遺跡である。その中でも、縄文草創期隆線文土器の編年的位置付けの明確化について、大きな役割を果たした。さらに、今回の再整理により、9層および6層の内容を明確化したことによって、草創期前半と後半の土器のあり方が具体的に示し得るようになった。

本稿では、今回整理した土器の様相を改めて整理し、上黒岩遺跡の9層および6層での土器の内容のまとまりを再確認する。さらに他の遺跡出土土器との比較を通して、位置づけを検討する。その上で、土器を通した草創期研究の見通しについても触れておくこととしたい。

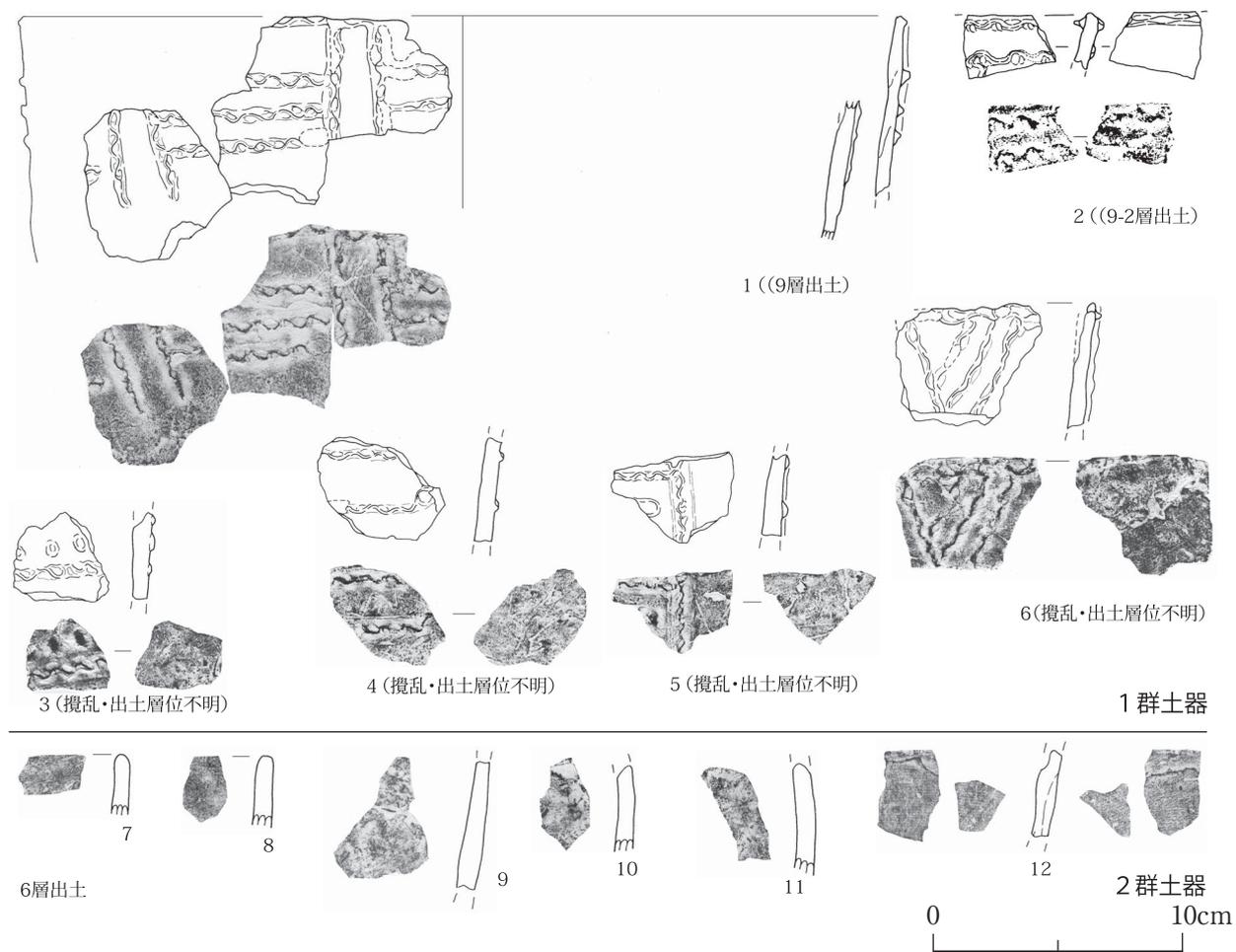


図 257 上黒岩遺跡出土1・2群土器 (S = 1/3)

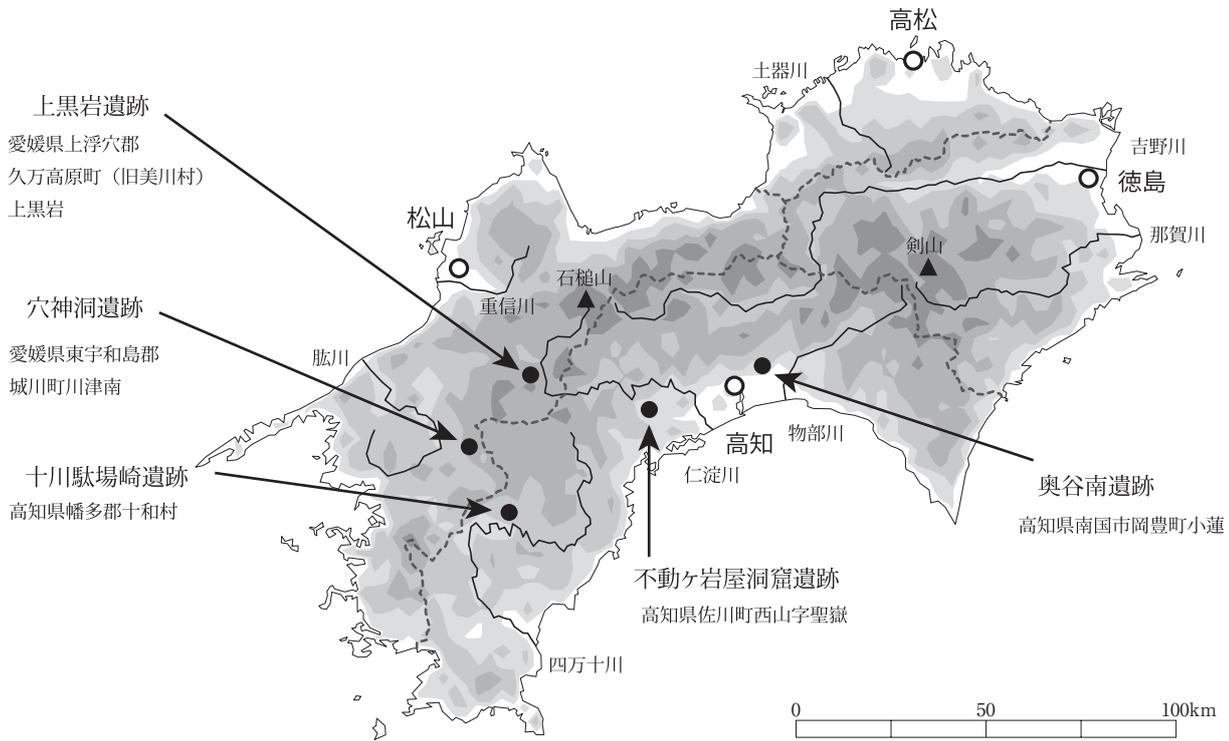
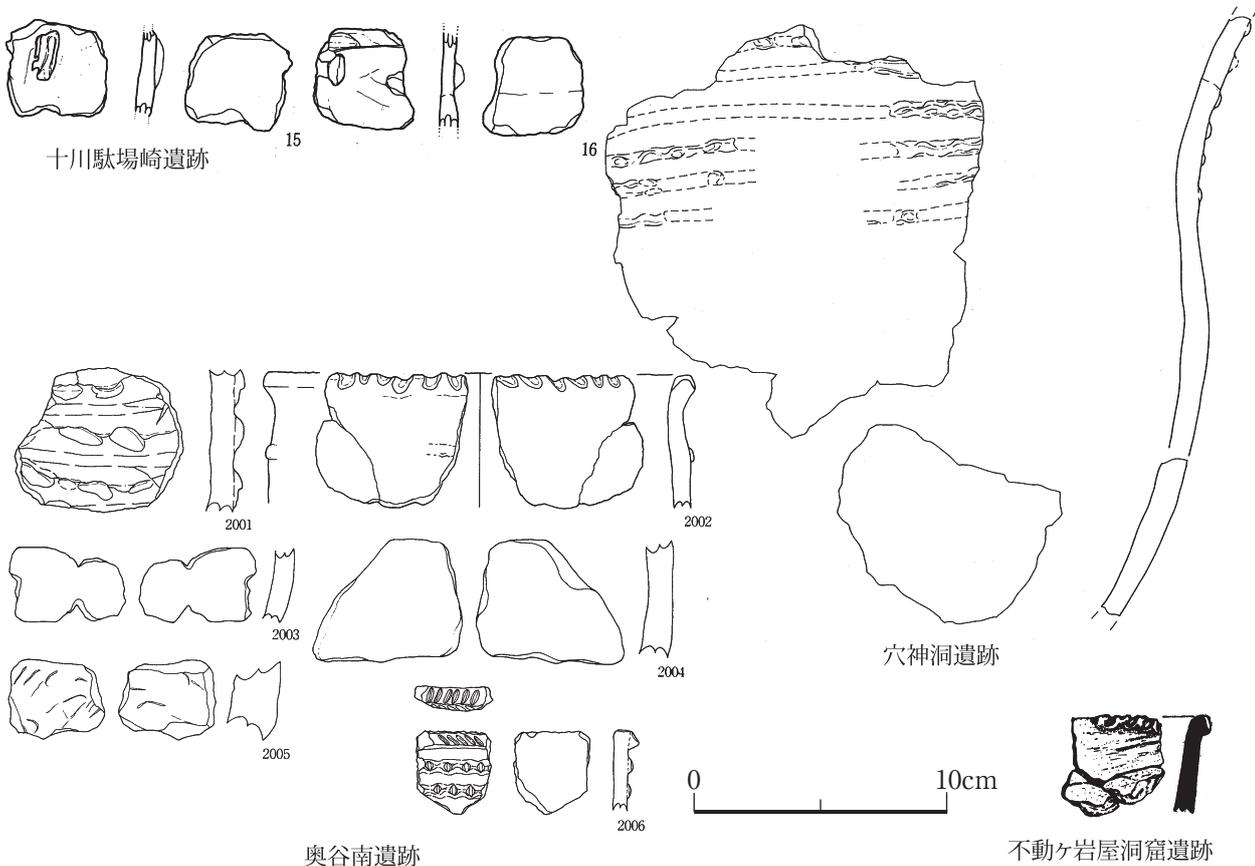


図 258 四国地方の隆線文土器出土遺跡



奥谷南遺跡

不動ヶ岩屋洞窟遺跡

図 259 四国地方出土の隆線文土器 (S = 1/3)

## 1 上黒岩遺跡第9層の隆線文土器

中四国地域を代表する草創期遺跡の上黒岩遺跡9層出土土器は、中四国の地域性として考えてよいものと期待できる。実際に観察した結果によっても、上黒岩遺跡の隆線文土器は、きわめて特徴的な内容を持っている。

地域的な特性と連続性は、四国（南側即ち太平洋側）にも認める。筆者の南関東編年観に仮設すると隆線文Ⅰ期は不明だが、Ⅱ期：上黒岩9層（上黒岩式）、十川駄場崎、Ⅲ期：穴神洞、不動ヶ岩屋、やや太い隆線の奥谷南2001、2002が当たる（図259）。上黒岩の、口縁部から縦位・斜位隆線の文様帯構成（図257-1、5、6）、口唇内側の隆線（図257-2）、短隆線（図257-5）・瘤状添付（図257-3）は、上黒岩式の個性である。

本書の土器報告において、上黒岩遺跡の草創期土器について層位別・個体別に示した。これらの土器群は、以下のような特徴によって、まとまることが指摘できる。下記の特徴を有する上黒岩9層出土土器を、時期的に短く一括性の高い土器群と考え、上黒岩式と設定する。

1. 横走隆線と三角形文様・斜位隆線による文様帯。
2. 短隆線、隆線端部を文様帯内に配する。
3. 口唇上端内面の隆線貼附。
4. 胎土の茎状植物繊維痕。
5. 隆線上部を軽くつまみ波状加飾。
6. 平丸底状の底部に上げ底状に隆線を巡らす。
7. 器面がやや乾いた状態で隆線を貼り付ける。器面に隆線がはがれた跡を残す例が多い。

これらのうちの隆線の形状や加飾方法から見ると、関東地方境川流域における小林編年〔小林1996〕のⅡ期、すなわち藤沢市SFC遺跡群Ⅰ区タイプ、藤沢市柄沢遺跡例、大和市上野遺跡第1地点、なすな原遺跡、花見山遺跡Ⅱ期〔坂本1995〕に対応する時期と捉えたい。

## 2 隆線文土器群の年代

土器の発明は何年前か、縄文時代として区分する隆線文土器は何年頃かを検討しておきたい。上黒岩遺跡の年代測定は、別稿でも報告したように、調査時に測定された例と今回新たに測定した結果とが極めて高い精度で一致しており、年代的に定点となるものといえる。

ここでは、炭素年代は $^{14}\text{C}$  BP（1950年起点で表記）、較正年代はcal BC（紀元前何年と表記、 $2\sigma$ で計算し、確率密度は%）で表記する。較正年代は、IntCal 04〔Reimer, Paula J. et al. 2004〕の較正曲線、今村峯雄によるRHCAL 3.0〔今村2007a〕を用いて $2\sigma$ の範囲で算出している。

最も古い土器である大平山元Ⅰ遺跡例〔中村・辻1999〕は、後述する他の測定例との関連から、15500～15700年前頃と捉える。国立歴史民俗博物館年代測定研究グループが2001年度～2005年度に収集し処理した縄文時代草創期、早期の土器付着物、共伴炭化材・種実の試料、54測定例について、土器型式・出土状況・ $\delta^{13}\text{C}$ 値を含む測定結果を検討した結果をみると、東京都御殿山遺跡の測定結果〔小林他2004〕から縄文時代の初めである隆線文土器最古期の実年代はおおよそ今から

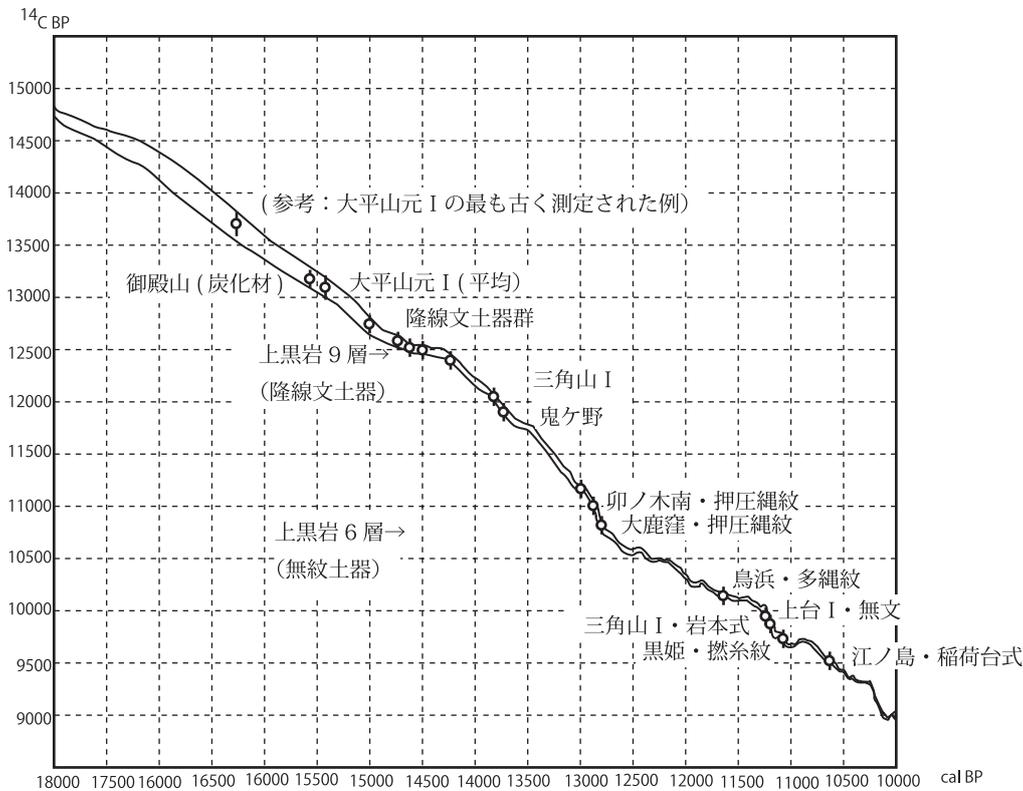


図 260 縄文時代草創期の較正曲線 (IntCal 04 から)

15500年前に遡り、縄文時代草創期はおおよそ15500～16000年前のいずれかの年代から、おおよそ11600年前まで続いたと推定した。同様に、縄文時代早期はおおよそ7000年前までと推定できる。上黒岩6層の無紋土器(図26下)は、土器としても年代(10085±320<sup>14</sup>C BP)からも草創期後葉である。

上黒岩に代表される隆線文土器は、<sup>14</sup>C年代で12200～12500年代の測定値が得られている。これは、較正年代にすると約14800～14200年前に集中し、隆線文の初めである御殿山遺跡は約15500～15000年前頃、隆線文の終わりである鹿児島県鬼ヶ野遺跡、三角山遺跡例は13800年前頃、よって隆線文土器文化は、1200～1700年間は列島の北から南まで継続し展開していたと考える。

なお、草創期後半や草創期と早期との境の年代については、無紋土器の扱<sup>(1)</sup>いなど土器型式学的検討とあわせ、不十分で絞りきれないが、おおよそ11500年前頃と考えている。

下記のcal BCは較正年代で紀元前表記、cal BPは較正年代で1950年より何年前の表記である。

隆線文 15650年前～13150年前cal BP (13700～11200 cal BC) 頃←上黒岩9層, 1群

押圧縄紋 12950年前～12250年前cal BP (11000～10300 cal BC) 頃

多縄紋・無紋 11950～10950年前cal BP (10000～9000 cal BC) 頃←上黒岩6層? 2群

### 3 上黒岩遺跡隆線文土器の位置づけ

予想的に、列島規模での上黒岩9層出土隆線文土器の位置づけを考えておきたい。

細い隆線による波状加飾を持った複数条の隆線横走による文様帯構成は、小林の境川流域隆線文土器編年のⅡ期に相当し、神奈川県横浜市花見山2式、大和市上野2遺跡〔小林ほか2005〕、藤沢市SFC遺跡Ⅰ区〔小林1993〕、東京都町田市なすな原遺跡例に対比可能である。これは、北九州地方福井洞窟例〔芹沢・鎌木1967、佐世保市教育委員会2007〕に対比されるであろう。

上黒岩9層より古い、小林の境川流域隆線文土器編年のⅠ期に相当（神奈川県藤沢市SFC遺跡Ⅱ区、Ⅴ区や横浜市花見山1式併行）する資料は上黒岩9層出土土器には見られず、四国ではその様相は不明である。北部九州では泉福寺洞窟下層部分が対応するであろう。

上黒岩9層よりも新しい、小林の境川流域隆線文土器編年のⅢ期に相当（神奈川県藤沢市SFC遺跡Ⅲ区や横浜市花見山3式併行）する資料も上黒岩9層出土土器には見られず、四国では愛媛県穴神洞遺跡に対比される可能性をもつ土器が出土する。北部九州では福井洞窟のやや隆線の細いタイプが対応する可能性があるが詳細は不明である。南九州地方の掃除山遺跡〔鹿児島市教育委員会1992〕のやや太い隆線が併行する可能性がある。

なお6層の無文土器は、爪形紋土器（宮崎県椎形遺跡など）、南九州隆帯文土器（鹿児島県三角山1遺跡〔小林ほか2006〕、鬼ヶ野遺跡〔小林ほか2004〕）やその流れを汲む太平洋側の土器群（静岡県葛原沢Ⅳ遺跡〔沼津市教育委員会2001〕）に併行する可能性があるが、具体的な根拠を挙げるに至らない。今後資料の増加を待って検討して行くべき課題である。

#### 4 上黒岩遺跡出土土器を中心とした縄文時代草創期研究の意義

現在、列島で一番古いといえる土器は、青森県大平山元Ⅰ遺跡の長者久保・神子柴文化の石器に伴った無紋土器である。土器付着物及び共伴炭化材について名古屋大学中村俊夫・辻誠一郎がAMS<sup>14</sup>C年代測定を行い、その測定値の平均値を較正年代にすると、15000-16000年前の間のいずれかとなり、15000年前をこえて土器の発生が晩氷期に遡ることは事実となった。大平山元Ⅰ遺跡の土器が16000年前になるかどうかはさておき、氷河期からの気候変動と関わる地質年代区分でいえば、土器製作の開始が更新世に遡ることは間違いない。その人類史的意義は、春成秀爾〔春成2001〕、工藤雄一郎〔工藤2003〕、谷口康浩〔谷口2002〕らが指摘している。だが、ただちに縄文時代が16000年前に遡った、ということではなく、まず、なにをもって縄文時代・縄文文化とするべきかを検討しておく必要がある。

縄文時代の始まりについての最も一般的な意見は「土器の発明（発生）または日本列島への伝播を持って縄文時代とする」、すなわち「土器があることが縄文時代の必要十分条件」という説だろう。氷河期の終わりに自然環境と大型獣絶滅など動植物相の変化を受け、マンモスハンターたる遊動的な生活から、土器及び弓矢の発明を経て、定住化し縄文時代へ移行したと理解されてきた。

日本の歴史区分として先史時代に「縄文時代」という歴史区分を置く場合、いつからいつにするべきか、という問題が時代区分の問題である。このうち、「いつまで」については弥生農耕の始まりと絡み、ここでは論じない。「いつから」縄文時代かという点に絞って考えよう。ここでいう「いつ」は、相対年代として、何を指標に時代区分するかという意味と、言葉通り「いつの時間か」すなわち絶対年代（ここでは暦年代であるが時間幅は百年幅くらいのやや幅広い時間）との2つの意味を

持つ。

まず断っておくべきことは、列島の先史時代（旧石器時代・縄文時代・弥生時代）は、日本史としての時代区分であり、東アジアの枠で考えれば、朝鮮半島から沿海州、サハリン、千島列島まで含めつつ、時期によって範囲が異なる地理区分での文化領域を考えるべきで、時期的にも「縄文文化」と一括りにまとめられるものではない、ということである。大塚達朗も指摘するが時期・地域別に解体される内実を持つ。それら連合体を、列島先史文化として便宜的・歴史的に認識するため「縄文文化」とまとめておくにすぎない。ただし、曖昧ながらまとめる基盤として、地理的に隔絶した列島内主要部に展開する、装飾された土器を多量に持つ文化として共通項を持つ。

縄文土器といっても縄を回転施文した「縄紋」（ここでは文化としての縄文と文様要素としての縄紋を区別する）をつけた土器ばかりではない。しかし、「縄紋」は、縄文時代の比較的古い段階（隆線文段階にも縄の痕跡があると考えているが定着するのは草創期後半）に現れた後、時期・地域によって消えたり現れたりするが、縄文文化最終段階及び北の地では続縄文として、縄文的要素の指標として土器に記し続けられる。よって、列島の地で展開した採集狩猟から水田稲作以外の栽培技術に基づく高度な生態環境の利用と動・植物質資源利用体系（漆技術も含む）を持つ先史文化を、便宜的に「縄文文化」、それが続いた時期を「縄文時代」と呼ぶならば、その指標は、確立された土器の生産・利用体系である。隆線文による装飾技法が定立し、世代間伝承が認められること、ある時期のすべての集団が土器を有し、地域的に共通した型式を持つこと、器形の分化・法量の分化が認められること、以上をもって以前の晩期旧石器文化に伴う無紋土器と一線を画する隆線文土器からが縄文文化であり、縄文土器・文化の時代であると考え。上黒岩遺跡第9層の隆線文土器は、その代表例の一つであるといえる。

## 5 まとめと展望

土器が安定的に存在し、ほぼ同時期におこる弓矢の発明と植物質食料加工技術の体系化により、定住化が進み、竪穴住居の構築、炉穴・集石遺構など土地改変への働きかけが技術的、また生態適応としても発展していく過程こそが縄文時代の始まりを表すと捉えられる。大平山元I遺跡等に代表される長者久保・神子柴文化の晩期旧石器や、今後存在について検討していくべき細石刃文化に伴う土器・土偶・焼成粘土加工物は、旧石器時代に存在した先駆的要素と考える。その当初においても、シベリア・沿海州から日本東北地方へ広がる隆線文・微隆起線文土器と、鹿児島・東海・関東に広がる隆線文・隆帯文土器とは、異なる系統の可能性はある。特に南九州から東海にかけて煙道付き炉穴がみられること、竪穴住居がみられることは、植物質食料の加工技術がよりシステム化し、定着的な生態的環境適応が発達、それが土器の装飾化へとフィードバックしたと仮定できる。以上の点から鑑みて、隆線文土器の内容を明らかにしていくことは大きな意味を持つであろう。

本稿では、上黒岩9層出土土器群が、上黒岩式として設定されるべき内容を持っていることを指摘した。これにより同時に、第6層出土土器群が文様を持たない事も注意されるが同時に胎土焼成においても、9層土器と同じ特徴を有さないことから、ことなる年代に含まれる土器群であることを指摘できる。

また、年代測定の結果、いまから14000年前ころに属する土器群であることが明確となった。

以上の結果は、改めて上黒岩遺跡第9層が草創期隆線文土器の中ごろの様相、さらにその後の第6層無文土器が草創期後半の文化内容を示すものであることを、強く示唆するものである。同時に、隆線文土器文化としても、おそらくは太平洋側の高知県奥谷南遺跡などと共通して四国～東海地方西部にかけての地域に及ぶ程度の土器型式分布圏を見いだすことができるのではないかと予想する。土器型式としての内容解明は、さらに類例の増加を待つて再検討していく必要がある<sup>(2)</sup>。

(小林謙一)

## 註

(1)——本稿では隆線文土器以前の地紋のないなどの土器を「無紋土器」、草創期後半から早期初頭の地紋を含む文様装飾のない土器を「無文土器」と書き分けておくことにするが、その区分は便宜的なものである。

(2)——本稿では、平成13-15年度科研費基盤(A)「縄文弥生時代の高精度年代体系の構築」(代表今村峯雄)、歴博平成16・17年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」(代表今村峯雄)、平成17・18年度学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」(代表西本豊弘)、平成17・18年度科研費基盤(C)「AMS炭素14年代を利用した東日本縄文時代前半期の実年代の研究」(代表小林謙一)、平成19年度科研費基盤(C)「炭素14年代を利用した縄文時代の居住期間の研究」(代表小

林謙一)のほか、歴博共同研究平成16～18年度「愛媛県上黒岩遺跡の研究」(代表春成秀爾)、平成19年度国立高エネルギー加速器研究機構放射光施設・中性子施設科学研究費補助学術創成研究費「パルス中性子源を活用した量子機能発現機構に関する融合研究」(研究代表池田進)、平成19年度「東アジア定住化過程の研究」(代表小林謙一)、遠部慎パレオラボ奨励研究などの成果を用いている。試料の前処理には、歴博年代測定実験室の坂本稔准教授、遠部慎、尾寄大真、宮田佳樹、新免歳靖、南部逸枝の諸氏の協力を得ている。AMS炭素14年代測定は、東京大学大学院工学研究系タンデム研究施設、(株)パレオ・ラボ社、(株)ベータアナリティック社、質量分析計安定同位対比測定には(株)昭光通商で測定した。

## 参考文献

- 今村峯雄編 2004『課題番号13308009基盤研究(A・1)(一般)縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築』  
今村峯雄 2007「炭素14年代較正ソフトRHC3.2について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集, 国立歴史民俗博物館  
江坂輝彌・岡本健児・西田 栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会, 平凡社  
岡本孝之・小林謙一・桜井準也ほか 1993『慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』1総論, 慶應義塾  
荻谷千明 2004『第39回企画展 底の尖った土器』笠懸野岩宿文化資料館  
荻谷千明 2008「関東地方北西部に認められる厚手の瓜形土器(下宿式土器)とその位置づけについて」『第21回縄文セミナー縄文草創期後半の諸様相』縄文セミナーの会  
遠部 慎 2006「北・東九州における縄文時代草創期末～早期前半の諸様相—大分県九重町二日市洞穴の年代測定—」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号, 九州縄文時代早期研究会  
遠部 慎・宮田佳樹・小林謙一 2007「北部九州における燃糸土器群と炭素14年代測定」『第17回九州縄文研究会福岡大会 九州における縄文時代早期前葉の土器相』pp.22-37, 九州縄文研究会  
遠部 慎・小林謙一・宮田佳樹・坂本 稔・西本豊弘 2008「南九州における縄文時代草創期から早期の炭素14年代測定」『日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会  
遠部 慎・宮田佳樹・小林謙一 2008「飯田市美女遺跡の土着炭化物の炭素14年代測定」『飯田市美術博物館研究紀要』第18号, 飯田市美術博物館  
大村 裕 2008『日本先史考古学史の基礎研究—山内清男の学問とその周辺の人々—』六一書房  
鹿児島市教育委員会 1992『掃除山遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

- キーリ, C.T.・武藤康弘 1982「年代 縄文時代の年代」『縄文文化の研究』第1巻, 縄文人とその環境, 雄山閣
- 工藤雄一郎 2003「更新世終末から完新世移行期における考古学研究の諸問題—環境変遷史と考古学的時間軸の対応関係—」『古代文化』第55巻第6号
- 慶應義塾 1993『湘南藤沢キャンパス内遺跡』第1巻, 総論
- 後藤信祐・相田 孝・亀田幸久・安藤美保 2003『野沢遺跡・野沢石塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第271集, 財とちぎ生涯学習財団埋蔵文化財センター
- 児玉健一郎・中村和美 1995『奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 小林謙一 1992「草創期住居状遺構について」『慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』第2巻, 縄文時代I部, 慶應義塾
- 小林謙一 1993「慶応SFC遺跡」『藤沢の縄文時代草創期を考える会』資料, 湘南考古学同好会
- 小林謙一 1996「境川下流域を中心とした縄紋時代草創期隆線紋土器の編年」『考古学講座かながわの縄文文化の起源を探るパート2』神奈川県考古学会
- 小林謙一 2004「青森県八戸市田向遺跡出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『田向遺跡』I, 八戸市埋蔵文化財調査報告書第105集, 八戸市教育委員会
- 小林謙一 2004「試料採取と前処理」『季刊考古学』第88号, 雄山閣出版
- 小林謙一 2004『縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房
- 小林謙一 2006「土器の始まりのころ」『歴博』No.139, 国立歴史民俗博物館
- 小林謙一 2006「AMS<sup>14</sup>C年代測定による縄紋時代草創期・早期の年代研究」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号, 九州縄文時代早期研究会
- 小林謙一 2006「静岡県大窪鹿遺跡出土炭化物の<sup>14</sup>C年代測定」『大窪鹿遺跡・窪B遺跡(遺物編)』芝川町教育委員会
- 小林謙一 2007「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集, pp. 365-387, 国立歴史民俗博物館
- 小林謙一 2007「尻労遺跡出土土物の<sup>14</sup>C年代測定」『AMS炭素14年代測定を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究(課題番号17520529 平成17~18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)) 研究成果報告書』, 小林謙一
- 小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」『歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系』縄文時代の考古学2, 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編, 同成社
- 小林謙一 2008「隆線土器からみた縄文時代のはじまり」『縄文時代のはじまり—愛媛県上黒岩遺跡の研究成果—』小林謙一・国立歴史民俗博物館編, 六一書房
- 小林謙一・桜井準也 1992『慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』第2巻, 縄文時代I部, 慶應義塾
- 小林謙一・今村峯雄・坂本 稔・大野尚子 2003「南関東地方縄紋集落の暦年較正年代—SFC・大橋・向郷遺跡出土試料の炭素年代測定—」『セツルメント研究』4号, セツルメント研究会
- 小林謙一・今村峯雄・坂本 稔 2003「野辺地蟹田<sup>(10)</sup>遺跡出土試料の炭素年代測定」『野辺地蟹田<sup>(10)</sup>遺跡』青森県埋蔵文化財調査センター
- 小林謙一・坂本 稔・尾寄大真・新免歳靖・村本周三 2004「東京都御殿山遺跡出土縄紋草創期土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『井の頭遺跡群 武蔵野市御殿山遺跡』第2地区N地点, 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部
- 小林謙一・今村峯雄・永嶋正春 2004「千葉県富里市古込V遺跡 千葉県富里市古込遺跡出土炭化物の<sup>14</sup>C年代測定」『考古学』2, 安斎正人編
- 小林謙一・坂本 稔・尾寄大真・新免歳靖 2004「黒姫洞穴遺跡出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『黒姫洞穴遺跡—第I期発掘調査報告—』入広瀬村埋蔵文化財報告, 第1号
- 小林謙一・今村峯雄・藤尾慎一郎 2004「鹿児島県西之表市鬼ヶ野遺跡出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『鬼ヶ野遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14), 西之表市教育委員会
- 小林謙一・今村峯雄・春成秀爾 2005「大和市上野遺跡出土縄紋草創期土器付着物の<sup>14</sup>C年代」『大和市史研究』31号, 大和市役所総務部総務課
- 小林謙一・今村峯雄・坂本 稔・陳 建立・酒井宗孝 2005「花巻市上台I遺跡出土縄紋草創期土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『上台I遺跡』(1), 花巻市博物館
- 小林謙一・坂本 稔・尾寄大真・新免歳靖・村本周三 2005「神奈川県万福寺No.1遺跡出土縄紋草創期土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『万福寺遺跡』有明文化財研究所
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・西本豊弘 2006「縄文時代草創期の炭素14年代測定」『日本考古学協会第72回総会発表要旨』日本考古学協会

- 小林謙一・今村峯雄・春成秀爾・西本豊弘・坂本 稔 2006「縄文時代前半期における<sup>14</sup>C年代測定」『日本文化財科学会, 第23回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 小林謙一・尾寄大真・新免歳靖・遠部 慎・松崎浩之 2006「平成17年度 鹿児島県三角山I遺跡出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」, 『三角山遺跡群(3)(三角山I遺跡)』第2分冊, 縄文時代早期以降編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96), 新種子島空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集, 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 坂本 彰 1995『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XVI, 横浜市ふるさと歴史財団
- 笹田幸佑・長友恒人・小林謙一 2008「ルミネッセンス法を用いた縄文草創期土器の年代測定」『日本文化財科学会・第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 佐世保市教育委員会 2007『福井洞窟範囲確認調査報告書』平成18年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 鈴木啓介 2003「第20回藤沢市遺跡調査発表会 江ノ島植物園内(藤沢市No.1)遺跡」『湘南考古学同好会々報』90, 湘南考古学同好会
- 芹沢長介・鎌木義昌 1967「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
- 谷口康浩 1999「長者久保文化期の諸問題」『大平山元I遺跡の考古学的調査』大平山元I遺跡発掘調査団
- 谷口康浩 2002「日本および極東における土器出現の年代」『國學院大學考古学資料館紀要』第18号, 國學院大學考古学資料館
- 谷口康浩 2005「極東における土器出現の年代と初期の用途」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XVI)』名古屋大学年代測定総合研究センター
- 東京都教育庁生涯学習部文化課 2002『前田耕地遺跡: 縄文時代草創期資料集』
- 長野県埋蔵文化財センター 2004『仲町遺跡』
- 中村俊夫・辻誠一郎 1999「青森県東津軽郡蟹田町大平山元I遺跡出土の土器破片表面に付着した微量炭化物の加速器<sup>14</sup>C年代」『大平山元I遺跡の考古学的調査』大平山元I遺跡発掘調査団
- 沼津市教育委員会 2001『葛原沢第IV遺跡(a・b区)発掘調査報告書I—縄文時代草創期・縄文時代—』沼津市文化財調査報告書, 第77集
- 春成秀爾 2001「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』第40巻第6号, 日本第四紀学会
- 宮井英一 1985『大林I・II 宮林 下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書, 第50集
- 望月 芳・桜井準也・小林謙一 1994『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書』第1巻, 縄文時代草創期, 藤沢市教育委員会
- 若月省吾・小菅将夫・萩谷千明 2003『西鹿田中島遺跡発掘調査報告書(1)』笠懸村教育委員会
- 渡辺直経 1966「縄文および弥生時代の<sup>14</sup>C年代」『第四紀研究』第5巻3・4号, 日本第四紀学会
- Hiroyuki Kitagawa and Johannes Van Der Plicht 1998 A 40,000-Year Varve Chronology from Lake SUIGETSU, Japan: Extension of the <sup>14</sup>C Calibration Curve. *Radiocarbon* 40 (1), 505-515.
- Reimer, Paula J., Baillie, Mike G.L. Bard, Edouard; Bayliss, Alex Beck, J Warren; Bertrand, Chanda J.H. Blackwell, Paul G. Buck, Caitlin E. Burr, George S. Cutler, Kirsten B. Damon, Paul E. Edwards, R Lawrence Fairbanks, Richard G. Friedrich, Michael Guilderson, Thomas P. Hogg, Alan G. Hughen, Konrad A. Kromer, Bernd; McCormac, Gerry Manning, Sturt; Ramsey, Christopher Bronk Reimer, Ron W. Remmle, Sabine Southon, John R. Stuiver, Minze Talamo, Sahra Taylor, F.W. van der Plicht, Johannes Weyhenmeyer, Constanze E., 2004 IntCal 04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP *Radiocarbon* 46 (3), 1029-1058.